

那珂川市の文化財 4

さくたのうなで

裂田溝

裂田溝とは？

那珂川市を流れる那珂川の「一の井手」(大字山田) から水を引き込み、あんどく ごろうまる まつ 安徳・五郎丸・松木のき いま みつ いた を通って今光に至るまでの総延長約5.5kmの人工用水路です。

※五郎丸から今光までの下流1.3kmは開発により昔とは裂田溝の位置が変わっています。



はじめに

さくたのうなで みやこ 裂田溝は「西の都」を構成する文化財群の一部として、令和2年6月19日に日本遺産に認定されました。「西の都」とは、今から約1300年前の大宰府を中心とした筑紫地区周辺一帯を指します。当時、西の都には東アジアとの外交および軍事の拠点である、大宰府政庁や、がいこう ぐんじ きょてん 関連施設としてやまじろ かま じいん かんがいようすいろ 山城、窯、寺院、灌漑用水路などが造られました。

本誌では、古代から現在まで利用されている裂田溝を、5つのポイントに絞って紹介します。私達に関わりの深い裂田溝ですが、実は知らないことがあるかもしれません。

本誌を通して、裂田溝の魅力を知っていただければ幸いです。



ポイント1

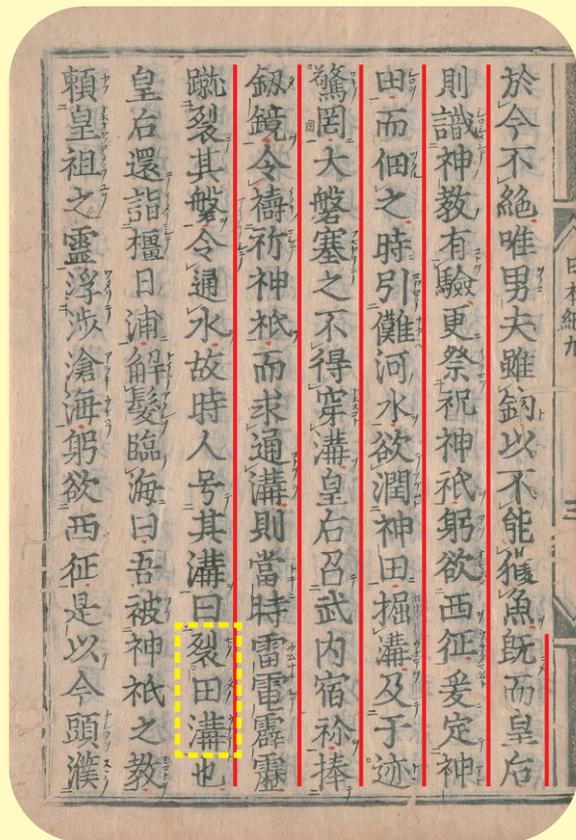
古い本(①・②)に載っています!

① 日本書紀

日本書紀は、日本で一番古い歴史の本の一つと言われています。この本が作られたのは奈良時代で今から約1300年前になります。

なんと!この本に裂田溝の話が載っています。一緒に読み解いていきましょう。

この本を・・・ → → → 読んでみると →



『日本書紀』(国立国会図書館ウェブサイトから転載)
黄枠の部分に「裂田溝」と記載があります。

既にして皇后、則ち神の教の驗有ることを識しめして、更に神祇を祭り祀りて、躬ら西を征ちたまはむと欲す。爰に神田を定めて佃る。時に讎の河の水を引せて、神田に潤けむと欲して、溝を掘る。迹驚岡に及るに、大磐塞りて、溝を穿すこと得ず。皇后、武内宿禰を召して、劔鏡を捧げて神祇を禱祈りまさしめて、溝を通さむことを求む。則ち當時に、雷電霹靂して、其の磐を蹴み裂きて、水を通さしむ。故、時人、其の溝を號けて裂田溝と曰ふ。

『日本古典文学大系 日本書紀 上』 岩波書店

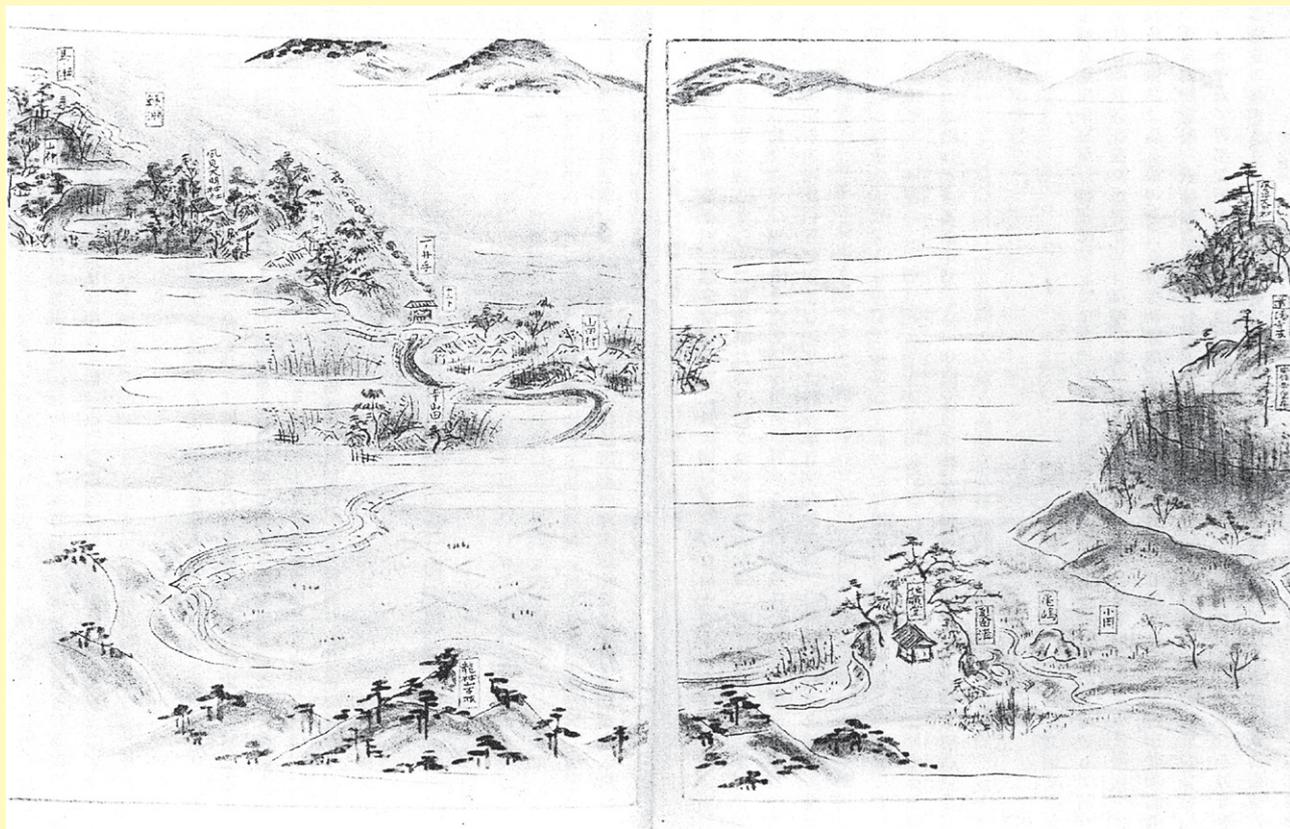
ちょっとわかりづらいので、簡単に訳しました

神功皇后が西での戦い(朝鮮出兵)の成功を祈るために、神様に捧げるお米を作る水田を作ろうとしました。そして、水田に水を引くために溝(水路)を掘っていました。工事の途中、迹驚岡(現在の安徳台)の辺りで大きな岩にぶつかって、溝を通すことができませんでした。そこで、皇后は武内宿禰に命じて神様に溝を通すようにお祈りをさせました。すると、雷が鳴り始め、塞いでいた大きな岩に雷が落ちて岩が裂け(砕け)、水を通すことに成功しました。このことから、人々はこの溝を「裂田溝」と言うようになったのです。

② 日本書紀以降の本

江戸時代の元禄期～宝永期 (1688年～1711年)、福岡藩内では地域の歴史をまとめる事業が盛んになりました。

『筑陽記』 (1705年) や『筑前国続風土記』 (1709年) は日本書紀の記事に触れ、裂田溝について書かれています。また、『筑前国続風土記付録』巻之七 (1798年) や『筑前名所図会』 (1822年) には絵図が載せられています。



『筑前国続風土記付録』巻之七 (1798) 加藤一純・鷹取周成編
『筑前国続風土記付録』 (1978) 文献出版より出典



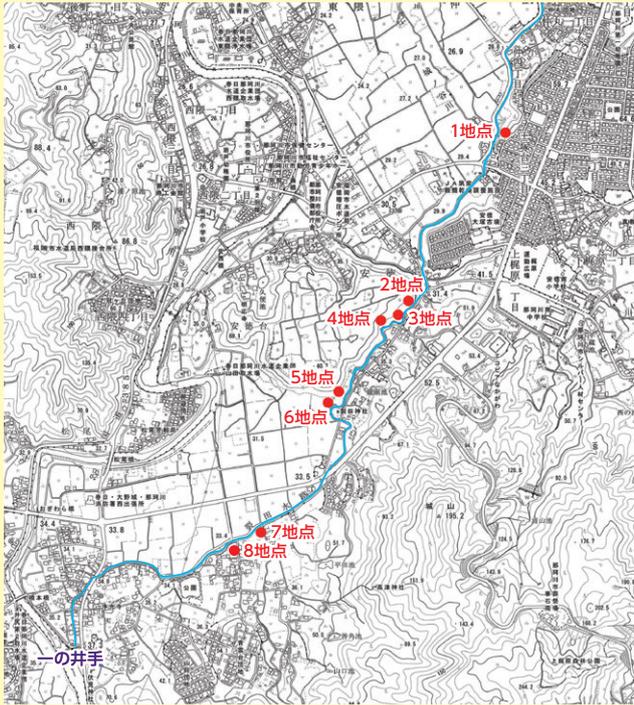
『筑前名所図会』 (1822) 奥村玉蘭編
『筑前名所図会』 (1985) 文献出版より出典

裂田溝 『筑前国続風土記』より

… (中略) 轟岡のほとりの溝に、大岩の上を、水の通る所あり。是日本紀にしるせし雷のさきたる所なるへし。其所の両方に小岩あり。一方は田の中に島の如くにして、其形亀に似たり。故に亀島といふ。

日本書紀から筑陽記までの間に、裂田溝の事を書いた本は見つかっていません。そのため、江戸時代に書かれたこれらの書物は、当時の裂田溝の様子がわかる貴重な資料といえます。

発掘調査でわかったこと!!



発掘調査地点図

平成14年度～平成16年度にかけて1地点から8地点にかけての計8か所で発掘調査を行いました。

そのうち裂田神社と安徳台の間に亀島と呼ばれる場所(5・6地点)と、一の井手公園付近の場所(7地点)の3地点から大きな成果が得られました!

それでは、発掘調査の成果についてみてみましょう。

ポイント2

し じつ うら 史実を裏付ける発見!



6地点から見つかった花崗岩

★『日本書紀』の記述を裏付ける発見★

裂田神社の裏付近で花崗岩と呼ばれる固い岩の岩盤が見つかりました。(左の写真)これは、「迹驚岡に及るに、大磐塞りて、溝を穿すこと得ず」の記述を裏付ける発見でした。この付近の工事がとても大変であったことが想像されます!

★『筑前国続風土記』の記述を裏付ける発見★

裂田神社付近には亀島と呼ばれる場所があります。今は平地ですが、一昔前までは丘になっていました。その場所を調査すると、段丘礫が発見されました。これは、「其所の両方に小岩あり。一方は田の中に島の如くにして…」と記される亀島であると思われ、江戸時代の様子が残っていることがわかる発見となりました!

※段丘礫とは、河川の流れてによって小石より大きな岩が積み重なり自然にできた高まりです。



5地点から見つかった段丘礫

ポイント3

かかしゅう
何度も改修工事をして大切に使われていた！



7地点から見つかった流木りゅうぼく



赤矢印の方向から見た流木の拡大写真かくだい



7地点から見つかった木杭きぐい



左の写真は裂田溝がどのように埋まっているかを調べるために、*ジオスライサーという方法を使って取り出した7地点付近の土層の写真です。

土層から、中世の人工水路の跡が3つ確認でき、この頃だけでも3回掘りなおされていることがわかりました。

以上のことから、裂田溝は現在まで何度も改修工事が行われ、大切に受け継がれてきたことがわかりました。

*地下ちその地層さいしゆを面で採取する調査方法で、主に活断層調査などに使われています。

裂田溝の調査では、遺跡への影響を最小限に留めるためにこの方法を用いて水路の土層を確認しました。

7地点からは流木りゅうぼくや昔の裂田溝はしの端が確認できました。また、溝の端の部分には木杭きぐいが打ち込まれていました。木杭を化学分析した結果、約700年前のものとなりました。

ポイント4

土木技術の高さ！

1 斜め堰^{※せき}

「一の井手」は、那珂川より農業用水等を取水するための堰です。裂田溝^{さくたのうなで}が造られたころの「一の井手」の様子はわかっていませんが、江戸時代に書かれた『筑前国続風土記』には、筑前国最大の大井手^{おおいで}だったと書かれています。

下の写真は昭和60年頃の「一の井手」の写真です。赤枠の部分が「一の井手」です。川に対して斜めに堰が造られているのがわかります。斜めにすることのメリットは3つあります。

- ① 堰への水の抵抗を弱める効果がある！
- ② 取水に必要な水の量を確保しやすい！
- ③ 土砂がたまりにくい！

このようなつくりの堰は、慶長13年(1608)に加藤清正が「鵜の瀬堰」(熊本県)を造ったのが初めとされ、この堰に似ていることから鵜の瀬堰以降に改修工事が行われたものと考えられています。※堰とは、農業用水・工業用水・水道用水などの水を川からとるために、川を横断して水位を調整する施設のことをいいます。



2 水路の勾配(傾き)は現代の技術と同じレベル！？

水路の傾きは、100mで20cm程度下がる緩やかな勾配になっています。これは、現代の排水管の勾配と同じ水準！さらに、この勾配を保ちながら、地形に沿って水路の幅を変えるなどして溝を造っています。これらのことから、当時の技術が高いことがわかります。



一の井手の取水口

3 江戸時代から使われている取水口

昭和24年の大雨で堰が壊れたときに、取水口の水門に正徳4年(1714)という文字が刻まれていることが発見されました。さらに、その構造自体が江戸時代中期以降(約300年前)のものであることから、水門に書かれた年に改修工事が行われたと想定できます。

ポイント5

りすい ちすい かつやく 利水と治水の両面で活躍！

一の井手から水を取り込む量は、裂田神社までの上流域約50ヘクタール、その下流域約200ヘクタールの合計約250ヘクタールの田畑を潤せるほどの水量となっています。これは、福岡paypayドーム約34個分の広さに相当し、とても広い面積を潤せる能力を持っています！

また、裂田溝は田畑を潤すだけではありません。雨が降った際、雨水が裂田溝へ流れ込むことで、地域の人々や田畑を浸水から守る治水の役目を果たしています。

コラム 生まれ変わった一の井手！！



昭和62年に完成した現在の一の井手

昭和27年（1952）3月に水害により壊れた部分の改修工事が行われ、昭和40年（1965）3月には全長に渡って改修工事が行われました。この2回の工事によって一の井手は完全にコンクリートによって固められました。その後、一の井手が古くなったことによる傷みや水もれなどの危険性があるということで、現在の一の井手が新しく造られました。



水位が下がると一部残した昔の姿を見ることができます（赤枠部分）



一の井手の傍に建つ碑（左の写真の★印の場所にあります。）

今は新しい一の井手となっていますが、昔の一の井手も地域の人々にとって大きな役割を果たしていました。そこで、昔の一の井手の姿を後世へ伝えようと、その一部を現地で保存するとともに、一の井手で使われていた石でできた碑をその傍らに建てました。

いま 現在の人々と共に生き続ける裂田溝

守る!

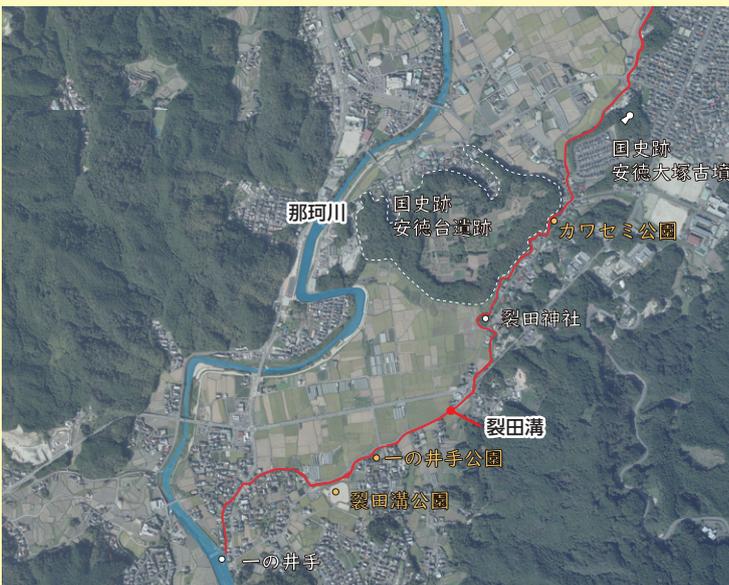


地域の方々による清掃活動の様子

活かす!



ライトアップされた裂田溝



裂田溝と周辺の史跡・施設

地域の方々が定期的に清掃^{せいそう}をされており、「裂田溝をきれい^{さくたのうなで}にしたい」「未来につなげていきたい」という思いのもと、現在まで裂田溝はきれいな水^{たも}を保ち私たちの身近で生き続けています。

裂田溝を活かしていこうと、安徳区、山田区をはじめ那珂川市内外の多くの団体が協力して、毎年11月にライトアップをしています。

当日は、竹灯籠^{たけとうろう}や市内の小・中学生が牛乳パックなどで作った灯籠、行灯^{あんどん}に光が灯され、訪れた人たちを魅了^{みりょう}してくれます。

おわりに

これまで見てきたように、裂田溝は地域の人々の力によって守られ、長い年月を経てもなお、水の流れを絶^たやすことなく、今も私たちの生活を潤^{うるお}し、共に生き続けています。

裂田溝のように、現在も使われている文化財は非常に珍しく、那珂川市の宝物と言えます。この宝物を未来に大切に守り伝えていくことが、今の私たちの役割といえます。

みなさんも身近に感じることでできる文化財! 裂田溝を散策^{さんさく}してその魅力^{みりよく}を感じてください。